

論文

レコードに初めて録音された沖縄音楽
—1915年『琉球新報』と大阪蓄音器の活動を通して—Okinawan Music Recorded on a Record for the First Time
: Research on Newspaper Articles in the Ryukyu Shimpo in 1915 and the Activities of the
Osaka Record Co.,Ltd.

高橋 美樹 (高知大学教育学部・音楽学研究室)

Miki TAKAHASHI

Laboratory of Musicology, Faculty of Education, Kochi University, Kochi, Japan

This article focuses on Okinawan music records from research done on the Ryukyu Shimpo in 1915 and the activities of the Osaka Record Co.,Ltd. The following four points of conclusion have been drawn. Firstly, Okinawan music records produced by the Osaka Record Co.,Ltd. in 1915 are the earliest records in the history of modern Okinawa. Secondly, 1915 was the time when the wood rose to introduce the new recording media called the record into Okinawa. Thirdly, it was the Ryukyu traditional music programs from the Ryukyu Kingdom era that were most successfully recorded. Fourthly, the records produced by the Osaka Record Co.,Ltd. influenced Choki Fukuhara who later would establish the Maruhuku Record Co.,Ltd.

はじめに

筆者はこれまで近代日本の録音文化史に着目し、とりわけ沖縄における録音メディアの導入について研究を進めてきた。明治～大正～昭和(戦前)の時代に、日本本土との交通が今ほど恵まれていなかった沖縄の地で、レコードや蓄音器という録音メディアが沖縄の音楽にどのように介在していたのか。琉球王府時代から脈々と受け継がれる琉球古典音楽や日常生活の原動力ともいべき沖縄民謡がレコーディングを経て音盤(レコード)になり、市場から大衆へ広がっていく。レコードの大衆化は、生演奏(ライブ)でしか聴くことができなかった大家の演奏を、レコードというメディアを通して鑑賞することを可能にした。この出来事は音響テクノロジーの発達によって、新たな音楽聴取スタイルが人々の生活に持ち込まれたことを意味する。

本稿の目的は、1915(大正4)年に大阪蓄音器株式会社が制作した沖縄音楽レコードに関して、沖縄の地方紙『琉球新報』の記事を読み解き、その実態を整理することにある。

近代沖縄における録音文化史のエポック・メーカーは2つある。1つ目は、1927(昭和2)年大阪で初の沖縄音楽専門レーベル「丸福レコード」を設立した

普久原朝喜の活動である(高橋2007参照)。さらに、2つ目は1934(昭和9)年、大手レコード会社・日本コロムビアが沖縄音楽のレコードを制作し、全国発売したことである(高橋2011近刊)。しかし、この2つのエポック・メーカーは日本のレコード産業システムがある程度確立された以後の活動であり、録音メディアの揺籃期における出来事とはいえない。

琉球古典音楽の演奏家・池宮城喜輝(1886-1967)のプロフィールを示した事典の中に「明治42年我謝秀益に入門、琉球音楽を学ぶ。30歳で琉球音楽をレコード化」¹⁾という記述がある。さらに、『沖縄大百科』の「池宮城喜輝」の項には「1915年(大正4)金武良仁、伊差川世瑞らとともに沖縄音楽最初のレコードを出す」²⁾と記されている(傍点著者)。しかし、この2つの記述が示す「沖縄音楽初のレコード」に関して、その詳細は不明であった。例えば、(1)いつ、どこのレコード会社が制作したのか、(2)どのような曲目を録音したのか、(3)どのような人々が演奏家として参加したのか、(4)録音はどこで実施したのか。筆者がこの点について調査していた際、下記の文章に出会うことができた。

「大阪蓄音機の商標は白熊で、ナショナルレコードと称し、一枚の定価は金1円30銭であった。…中略…どういふ径路を経て交渉が纏まったのか判からないが白熊ナショナル・レコードは、ニッポノホンよりも先に琉球俚謡の録音に手をつけていた。新垣平・伊差川世端・屋良利禄・池宮城喜輝・高安朝常・饒平名光徳・宇利地小カメ・富原盛勇・安元詠勵・名嘉山亘・古野盛珍・小灣カマト・我謝秀盛・小橋川朝英・永村清薄・金武良仁 一行16名は40種の琉球俚謡を三味線胡弓笛の伴奏で録音した」(山口1936:183-186) (傍点、下線は筆者)

山口亀之助が1936年に発刊した『レコード文化発達史 第巻 明治大正時代初篇』の中に、琉球(沖縄)の音楽の録音に関する上記の記述があり、「大阪蓄音器」による取組みであったことが判明した。そこで、本稿では沖縄音楽初のレコード制作について、長らく不明であった数々の点を整理する。

1 『琉球新報』にみる沖縄音楽のレコード制作

本項では1915(大正4)年8月23日から11月22日の期間、『琉球新報』に掲載された記事を対象として、沖縄音楽初のレコード制作の実態を読み解いていく。

1.1 沖縄音楽の録音風景

『琉球新報』にレコードに関する記事が初めて登場するのは、1915年8月23日である。この日の記事には、沖縄音楽がレコード化される背景と経緯が記されている。

1915年8月23日「琉歌レコード生る」『琉球新報』

「蓄音器の流行は近来驚く可き程で現今は本県でも一寸した町なら其亮々の音を聞くを得るが惜しいことには今迄琉歌のレコードが無く為に本県婦人には左迄顧みられなかったが此度石門森楽器店主人森宗十郎君が主催となり森仲太郎 山口全則君を後援として琉球音楽趣味の鼓吹を目的で琉球音楽奨励会なるものを組織。琉歌の各種の夫々本県一流の音楽家に演奏せしめそれをレコードに取り従前のレコードより大格安を以て販売するようで檳尾と云ふ技師もわざわざ内地から出張来県して居ることとて此の3、4日内に吹込を為すそうだから今後は本県一般家庭でも自由に琉球音楽の数々を聞くを得るだろう因に特約店へ募集する由なれば希望者は同店に申込むべしと」(下線、ゴシック体は筆者。以下同じ)

上記の記事から、以下の点が読み取れる。

(1)1915年時点まで琉歌(琉球の歌、あるいは琉球音楽

の意味であろう)のレコードが制作されていなかった。

- (2)(1)の理由により、琉球音楽の趣味を奨励し普及させることを目的として、那覇市石門通りにある森楽器店の主人・森宗十郎が主催となり「琉球音楽奨励会」を組織した。
- (3)琉球の音楽の曲目を沖縄県の一流の音楽家に演奏させ、それらを録音する。そして、製品化されたレコードを格安にて販売する。
- (4)「従前のレコードより大格安」という記述により、琉球音楽以外のレコードは1915年以前にも販売されていたことがうかがえる。
- (5)日本本土からレコーディングのために、檳尾という録音技師が沖縄へ来ていた。
- (6)レコードが販売されれば、沖縄県の一般家庭においても琉球音楽を聴くことができる、と期待している。

次に、8月30日の記事ではレコーディングの実際が詳細に記されている。

1915年8月30日「琉歌吹込みを聞く」『琉球新報』

「一昨日から石門通り森楽器店主の主催とせる琉球音楽奨励会のレコード吹込みを奥武山公園内城間氏別荘でやって居るが、昨日吹込みを為すべき音楽家は首里から高江洲氏 那覇から城間、伊差川、我謝、池宮城の諸氏であった。同別荘の一室には幕が垂れて其後方が即秘密室其所には極秘密にせる音声を蓄する機械が備へられて居る。而して前記の垂幕の中央には穴がありて其所からラッパが機械に繋ぐようになって居る。午後1時頃になって音楽家の声調や三味線の音調等が漸くなって高江洲氏の源河早川節を吹込む。だが先づ初めに前記の通り幕の中央にラッパ2つが繋がれる。1つは口に向け1つは三味線の胴に向けられた。やがて1室は四方外界から音声の這入らぬように密閉され高江洲氏はラッパに節を吹き込んだ。物の1分間位して唱うをやめると今度は反対に高江洲氏が唱った通りの歌が普通蓄音器のレコードの約3分1弱の音量で聞えた。見れば初手の音楽家の音量が原版に印せらるるや否やの試験である。是れが済むと本吹込みを行う。かくすること数回前記琉球音楽の大家と云われる諸氏が3分と40秒間に唱い能う種々の節や口説を吹込んだ。而して是等諸氏が吹込んだ歌が如何にレコードとなるかと云えば先づ吹込んだ声は幕内に設いてある蠟版に印せられる。此の蠟版が又唯の蠟でなく未だ日本で製造に能わずして独逸米国辺の輸入を受けてるそうである。此の蠟版に取ったものを今度は電気銅版に取る。かくすること2回にして初めて普通世間で用いて居

るレコードが出来上るそうである。昨日吹込んだ琉歌も近々の内に大阪に持ち運ばれ新しくレコードとなって現われるそうだが 歌種は40種で歌手は琉球音楽の大家と来てるし 本県家庭の娯楽としては趣味と云い申分ない楽器であるからさぞ歓迎されることであろう」

上記の記事から、以下の点が読み取れる。

- (7)レコーディングは1915年8月28日から実施している。
- (8)レコーディングの場所は、那覇市奥武山公園内にある城間氏の別荘である。
- (9)演奏家は首里（琉球王府時代の都）や那覇市から参加していた。
- (10)試験録音の際には高江洲氏が1分間程歌った。その後、再生し、歌が録音されているかどうかの有無を確認した。
- (11)録音に使用するラッパの1つは歌う人の口に向けられ、もう1つは三線の胴に向けられた。
- (12)レコーディング本番では、各曲3分40秒以内で、琉球古典音楽や口説を40種録音した。
- (13)録音された蠟版は大阪でレコードとして製品化された後、沖縄へ送られてくる予定である。

1.2 沖縄音楽を録音した人々

レコーディングに参加した演奏家について、下記の記事では13名の名前が挙がっている。

1915年9月3日「琉歌レコード仕上」『琉球新報』

「森正次郎、同仲太郎、山口全則主催の琉歌レコードは去る31日までに吹込みを終了し一昨日技師等は是を携へ上阪せるが該レコードの仕上は多分9月下旬ならんと。因みに琉歌吹込を為せる音楽家は下の通り △高安朝常△我謝秀盛△小橋川朝英△金武良仁△城間恒有△古堅盛珍△伊差川世瑞△安元詠勵△池宮城喜輝△饒平名光徳△屋良利禄△富原盛勇△（御座楽：新垣平其他数名）」

一方、山口の著書には、「新垣平・伊差川世瑞・屋良利禄・池宮城喜輝・高安朝常・饒平名光徳・宇利地小カメ・富原盛勇・安元詠勵・名嘉山巨・古野（筆者註：古堅）盛珍・小灣カマト・我謝秀盛・小橋川朝英・永村清薄・金武良仁 一行16名は40種の琉球俚謡を三味線胡弓笛の伴奏で録音した」（山口1936：186）とある。

『琉球新報』の記事に掲載されていない者は、宇利地小カメ・名嘉山巨・小灣カマト・永村清薄の4名であり、逆に山口の著書に記載されていない者は城間恒有である。『琉球新報』と山口の著書双方に挙げられた名

前をまとめると、17名になる。それらの17名を琉球古典音楽の主な流派である野村流、安富祖流などに分けると、以下ようになる。

【安富祖流】金武良仁、古堅盛珍

【野村流】高安（高江洲）朝常、我謝秀盛、小橋川朝英、城間恒有、伊差川世瑞、安元詠勵、池宮城喜輝、饒平名光徳、屋良利禄、富原盛勇

〈御座楽〉 新垣平

【不明】 宇利地小カメ、名嘉山巨、小灣カマト、永村清薄

初めに、安富祖流の演奏家について紹介する。

金武良仁（1873-1936）は19歳で安富祖正元（安富祖流の創立者）の高弟・安室朝持に師事し、1898（明治31）年25歳の時、東京の尚侯爵家で西園寺公望・大隈重信らを招いての席上で琉球音楽を披露している³⁾。1934（昭和9）年、1936（昭和11）年には日本コロムビアで琉球古典音楽を十数曲録音し、レコード化された。それらのレコードは戦後、数回に亘り再発売され、2000年にはCDに復刻されるほど貴重な音源となっている。

古堅盛珍（1852～1920）は安富祖流2代目である安室朝持の高弟であった。息子の古堅盛保（1882-1961）は18歳で父から本式に手ほどきを受け、25歳で金武良仁の門に入る⁴⁾。そして、盛保は1934年金武とともに、日本コロムビアで琉球古典音楽を録音している。

次に、野村流の演奏家について紹介する。上記の演奏家の中で、我謝秀益、小橋川朝英、城間恒有、伊差川世瑞、安元詠勵の5名は同じ師匠に学んでいる。彼らの師匠・桑江良真（1831-1914）は、若くして野村流創始者の野村安趙に入門した人物である。桑江は安趙の高弟としてその技を体得し、音楽教育者としてもすぐれた成果をあげた。我謝ら5名を初め、桑江の弟子たちは、後年の野村流繁栄の基礎を築き上げたといわれる⁵⁾。

桑江の門下生の中でも、伊差川世瑞（1872-1937）は1924（大正13）年に野村流音楽協会を創立し、初代会長となった。その後、15年の長い間、野村流音楽協会会長を務める。さらに、1935（昭和10）年高弟・世礼国男との共著で『声楽譜附 野村流工四』を創作出版し、琉球古典音楽の普及を促進した。

また、1909（明治42）年に我謝秀益へ入門した池宮城喜輝は、大正5年頃には声楽家としての地位を確立していたという。1924（大正13）年に野村流音楽協会が創立された時には副会長に就任する。戦後、池宮城

から池宮に改姓し、神奈川県川崎市で野村流の普及に努め、関東一円の沖縄芸能研究会を組織した。1952（昭和27）年、野村流音楽協会の5代目会長となり、昭和38年に至る11年間その運営発展に大きく貢献した⁶⁾。

富原盛勇^{とみはらせいゆう}（1875-1930）は「独特の三線奏法で演唱して、『富原マークニー』としようされるほど」⁷⁾の人物である。装飾音を多用する三線奏法は、それまでの琉球古典音楽にはみられない奏法であった。1927年に丸福レコードを設立した普久原朝喜は「小学校の5年生のころ金持ちの人が購入した蓄音機をみたときには珍しくて驚いたものです。…中略…そのときいた歌が富原盛勇という人のマークニー（筆者註：マークニー。広告では《宮古の子》と表記）ティマトゥーでした」⁸⁾と語っている。普久原は少年時代、富原のレコードを通じて、早弾きの奏法を教わったとも述べている。レコードは次世代の演奏家を育てる役割も担っていたといえる。

1.3 沖縄音楽レコード・大阪～沖縄到着期

沖縄音楽のレコードが大阪で製品化された後、船舶で沖縄へ送られ到着するまでの様子は、以下5件の記事に紹介されている。

1915年9月27日「琉歌レコード到着期」『琉球新報』

「琉球音楽奨励会にて兼て吹き込みたる琉歌レコードは目下製造中の処先日（の）便より森楽器店主レコード受取の為上阪したる由なれば多分来月2、3日頃当地着の予定なりと因みに値段は該品到着後出来得る限り安価にて発売すべしと」

1915年10月14日「蓄音機の新音譜」『琉球新報』

「過日蓄音機の技師来県して本県流の音曲をレコードに取りたるが成績頗る良好ひして那覇丸に積み大阪を発送したる由なれば16日には着すべしと云う音曲の種類は40種にして本調子二揚り其他口説類より流行の小唄に至るまで粹を集めたりと云ふ因みに本県の音曲が蓄音機のレコードに入りたるは之を以て嚆矢とす」

1915年10月17日 ◎特別広告「琉歌レコード未着」『琉球新報』

昨日の便より到着する予定なりし琉歌レコードは未着に付20日後の便船にて到着可致候
間此段申込者各位に広告仕候也

森楽器店内 琉球音楽奨励会

1915年10月21日「音譜到着」『琉球新報』

「琉球音楽蓄音機の新音譜は昨日森楽器店に到着せ

るが吹き込みの成績も意外に良好にて音も高く呂律も明晰にして技師も予想以上の成績をよるこび居れりと」

1915年10月21日 ◎特別広告『琉球新報』

琉歌レコードは昨日の沖縄丸便より到着仕り候間此段謹告候也

10月21日 森楽器店内 琉球音楽奨励会

上記5件の記事から、以下の点が読み取れる。

- (1)森楽器店の店主は1915年9月以降、製造されたレコードを受取るため、大阪に出向いていた。
- (2)大阪発の那覇丸に積み込まれたレコードは、10月16日に沖縄へ到着する予定であったが、実際には到着しなかった。そのため、「琉歌レコード未着」との特別広告を『琉球新報』に掲載した。
- (3)レコードは沖縄丸にて10月20日に沖縄へ到着し、森楽器店に届けられた。録音状況は良好であり、音質も明瞭であった。

1.4 沖縄音楽の生演奏とレコード鑑賞

1915年10月20日に沖縄へ到着したレコードは、同年10月末の音楽会において鑑賞する運びとなった。以下3件が、音楽会に関する記事である。

1915年10月17日「日基の記念音楽会」『琉球新報』

「日基教会に於ては御大典を記念する為め予ねて教会堂設立の企画をなしてみたりしが今回この費用の幾分かにかつてんが為め醸金募集の大音楽会を来る18、19の両日間大正劇場に於て挙行することになりたる由にて当日は特に琉球音楽大家の演奏と琉球音楽蓄音器の

吹奏との対照試演を試る可しとのことなれば定めし盛況を呈するならん 因に当日演奏の順序は下記

△奏楽開会の辞（伊江朝貞氏） △讚美歌合唱（女子青年団）

△琉球音楽（古堅、高安、金武、桑江、伊江諸氏）

△バイオリン合奏（備瀬兄弟）

△琉球語讚美歌（新垣信一氏） △蓄音機（琉球音楽諸家の吹込） △英唱歌独吟（伊江友子） △バイオリン（名嘉真武輝氏） △琉球浪花節 △音楽器（琉球音楽）

其の他余興として普天間の安里信明西原小那覇伊保ノ浜の東風平朝由との取組角力あり

因に一般入場料は一党参拾銭 二等二拾銭なりと云ふ」

1915年10月21日「首里の大音楽会」『琉球新報』

「日基主催の音楽会は引き続き昨日も大正劇場にて開催すべかりしが都合により昨日の開会を休み本日より首里久場川朝日座に於て開催する由にて琉球音楽 西洋音楽 琉球浪花節 宗教劇学生団等民団の角力等ありと因みに蓄音器琉歌レコードは昨日の便船にて到着したりとのことなれば一層盛況を呈すならん」

1915年10月24日「首里の音楽会」『琉球新報』

「日基教会主催の記念会堂設備醸金募集の大音楽会は21日来首里朝日座にて開催の所連日連夜大入の盛況にて 特に琉球音譜レコードは聴衆をして感興措しく能はざらしめたる由にて昨晚を以て千秋楽を告げたり」

上記の記事から、以下の点が読み取れる。

1915年10月23日 ◎広告『琉球新報』

本 県 家 庭 の 大 福 音

- ▲ 御待ち兼の琉歌レコードは愈々着荷大売出し致し居り候
- ▲ 予想以上に上出来致県下湧が如き大人気にて歓迎せられつつ有之候
- ▲ 娯楽機関少き本県に於ては実に空前の大提供に御座候
- ▲ 本日より一週間は初売り出しとして大々の割引販売致すべく候
- ▲ 蓄音器の捨売りは未だ日本に於いて試みられざる殆ど唯同様に候
- ▲ レコード及び器械のみならず附属品は一切破天荒の割引致すべく候
- ▲ 座して大家の音楽を聞き得るは唯琉歌レコードの外他に無之候
- ▲ 物は試めし論は証拠にて候へば是非御買求め御批評下され度候
- ▲ 御入用の方は御申込み下されば区内は直に持参可致候
- ▲ 簿利多売は勿論支那は堅牢無比にして之れ蓄音器界の霸王に御座候

10月23日 森楽器店内 琉球音楽奨励会

主催者 森宗十郎 森忠太郎 山口全則

琉 球 歌 と 蓄 音 器

(1)1915年10月18日～19日に那覇市の大正劇場において、日基教会の教会堂設立の費用を充足させるため、音楽会を実施した。

(2)音楽会のプログラムには琉球古典音楽の演奏家（古堅、高安、金武、桑江、伊江諸氏）による生演奏と、琉球音楽奨励会主催により録音したレコードを蓄音機によって再生し、鑑賞する内容が盛り込まれていた。つまり、琉球古典音楽の生演奏とレコード鑑賞を1つの音楽会の中で実施する試験的な演奏会であった。レコードは10月16日に沖縄へ到着する予定であったため、この日程に合わせて音楽会を10月18日～19日とし、プログラムもレコード鑑賞を含めたものとしたと推察できる。しかし、16日にレコードが届かなかったため、18日～19日の音楽会ではレコード鑑賞は行われなかったものと思われる。

(3)先の録音に参加した演奏家の中で、この音楽会に出演したのは、安富祖流から金武良仁と古堅盛珍、野村流から高安朝常である。

(4)1915年10月21日～23日に首里の朝日座においても音楽会が開催され、連日連夜盛況のうちに閉幕となった。20日にレコードが到着しており、レコード鑑賞は予定通り、実施されている。

(5)レコード鑑賞は聴衆に大いに興味を感じさせた。

1.5 沖縄音楽レコードの新聞広告

琉球音楽奨励会は1915年10月20日にレコードが到着した後、以下2件の広告を掲載した。

1915年11月24日 広告「大声蓄音器と琉歌音譜大割引」『琉球新報』

大声蓄音器と琉歌音譜大割引

サウシン 御前風 上り口説 下り口説 干瀬節 (述懐) 干瀬節 (明笛)
 揚タカニク節 茶売節 アヤグ (トーチ節) / サアサア節 揚七尺節
 主と妻 / 與那原節 立雲節 村原のチャー (上下) 宮古の子 辺野喜節
 ムンジュル節 散山節 四季口説 子持節 湊原節 小浜節 仲道節
 伊野波節 姉妹敵討 散山節 踊クワデイサ節 恋の花節 揚竹田節
 キザミ節 手間当カナヨ一節 仲間節 平敷節 黒島口説 センスル節
 安里屋節 スワイフシン 述懐節 干瀬節 仲竹田節 浜千鳥節

複写 現価75銭 複写 特価45銭
 現吹込 1円50銭 現吹込 特価1円

石門通森楽器店内 琉球音楽奨励会

上記2件の広告から、以下の点を読み取れる。

- (1)紙面を大幅に割いた10月23日付の大広告において、「琉球音楽のレコードは沖縄県の一般家庭に大きな幸福をもたらすもの」という宣伝文句を前面に掲げている。
- (2)10月23日から一週間は「初売り出し」期間として、大幅に割引きして販売していた。
- (3)レコードを再生する蓄音器までも、損失をかまわず安値で売ろうとする意気込みがみえる。
- (4)座って琉球古典音楽の大家の演奏を聞くことができるのは、このレコードの他にはない、と強調している。
- (5)那覇市の某区内であれば、購入申込み後に自宅まで配達するサービスを実施しようとしていた。
- (6)11月24日付の広告には、録音された曲目一覧が掲載されている。これらの曲目は琉球古典音楽 (御前風、述懐節、干瀬節、揚七尺節など)、沖縄民謡 (キザミ節、手間当カナヨ一節など)、八重山民謡 (安里屋節など)、口説 (上り口説、下り口説、四季口説、黒島口説) などに分けられる。他には、組踊の演目である姉妹敵討の名前も見られる。

また、11月24日付の広告には「複写 現価75銭 複写 特価45銭 / 現吹込 1円50銭 現吹込 特価1円」というレコード1枚の価格が示されている。発売からわずか1ヶ月であるにも拘らず、大阪蓄音器で製品化されたレコードの他に、それらの複写盤が販売されていた。この件に関しては、以下の記事を読むと状況がうかがえる。

1915年11月22日「よして呉れよ そんな事は」『琉球新報』

「近頃琉球音楽奨励会で愈々技師を連れて来口吹込んだレコードを△某店では複写 (つまり偽せ物) して 75 銭づつ で売出して居るとの事△それで同会では折角娛樂少い県下の為めに製造した物を△複写といふ粗悪な品が出ては音楽家の名誉にも関る事だからと△某店売出しの複写盤を対照かたかだ更に取り寄せて 45 銭づつ で売るとの事△誠に痛快な次第である△同じ偽せ物ならドーせ品が悪い事は極って居るから△可成安い物を買った方が得策であらう△而し先にも云ふ通り偽せ物はドーせ偽せ物だから本物は値は高くつきしも折角購求する人なら本物を買ふには定って居るか△尚ほ諸君にも本物のレコードと複写と対照して求めたら間違はなからう」

- (7)沖縄県内のある店では無許可で複写盤を制作し、1枚75銭で販売していた。
- (8)複写されたレコードは当然ながら音質も悪く、これらが大衆に普及すると、録音に参加した演奏家たちの名誉を傷つける可能性もある。そのため、琉球音楽奨励会では売り出し中の複写盤を取寄せ、1枚45銭で販売した。それに伴い、原盤レコードは1枚1円50銭で販売するところを、特価の1円で販売する旨を示したのが、11月24日付の広告である。
- (9)だが、大正4年当時、沖縄で複写盤を制作できる会社が本当に存在していたのだろうか、という疑問が残る。後述するが、大阪蓄音器は1912 (大正元) 年に設立当初、複写盤の制作販売を中心に行っていた会社であり、自社で録音した音盤を製造する活動は1915年以降に実施されている。沖縄音楽レコードの

現物が発見されていないため、想像の域を出ないが、複写盤も大阪蓄音器が製造していた可能性は否定できないだろう。

2 大阪蓄音器株式会社の設立と活動歴

本項では、沖縄音楽レコードを制作した大阪蓄音器株式会社について整理する。

2.1 大阪蓄音器株式会社の設立

大阪蓄音器株式会社（以下、大阪蓄音器）は、1912（大正元）年10月1日大阪市南区長堀橋筋2丁目20番地に設立された。会社設立の目的は「蓄音機音譜及び附属品の製造販売」（山口1936:183）であった。製品はナショナル・レコードと称され、商標は「白熊印」である。

大阪音楽大学音楽博物館所蔵の資料によると、設立者は大阪の実業家・榎尾長石衛門であった。山口の著書には取締役として榎尾長石衛門の他に、榎尾慶三、牧野久米造、榎尾祐治、佐々木貞吉の名前が挙がっている（山口1936:183）。その中でも、榎尾長石衛門、榎尾慶三、榎尾祐治の3名は、同じ大阪市北区東野田町105番地に居住していることから、家族などの血縁関係にあったものと思われる。また、「重役の1人榎尾慶三氏は大正10年に単身中華民国の国際都市たる上海の地に乗込み、彼地で種々雑多の後、華名上海留声機器公司の名に於いて鸚鵡牌レコードの製造を開始し、支那音楽の録音に成功した」（山口1936:183-184）という記述がある。榎尾敬三は大阪蓄音器の経営を退いた後、1921（大正10）年に上海の地でもレコード製造に携わっていたことが確認できる。

大阪蓄音器本店は「大正4年3月1日に大阪市南区塩町2丁目8番地へ。大正6年2月15日に大阪市北区東野田町7丁目105番へ」（山口1936:183）移転している。さらに、「大正5年には東京市神田区鍛冶町8番地（今川橋大通）に出張所」（山口1936:183）を設置するほど、経営を拡大していた。しかし、大阪蓄音器は1917（大正6）年に京都の東洋蓄音器合資会社（オリエン・レコード）に併合され、1920（大正9）年7月1日に清算を結了している（山口1936:183）。

2.2 複写盤から自社吹き込み盤の製造へ

大阪蓄音器は1912年の設立当初、他のレコード会社が出したレコードを複写し製造する複写盤メーカーの1つであった。岡田則夫によると、「大正初期に設立されたレコード会社のなかには、自社吹き込み盤のほかに、他者のレコードをコピーしてつくる複写盤のメーカーも兼ねたところがあった。ヒコーキ印の帝国蓄音器…中略…東洋蓄音器」（岡田1991.8）などがそれに

相当する。さらに、大阪蓄音器は「関西の複写盤製造の大手」（岡田1991.8）でもあったという。複写盤の製造は、原盤をもつレコード会社に無許可で実施していたと考えられる。今でいう「海賊盤」を堂々と販売し、商業的利益を得ていたことになる。大阪蓄音器の複写盤は、米国ビクター、ライロホン、ニッポノホンのレールから複写したものが大部分を占めていた。

大阪蓄音器は1915（大正5）年6月以降、自社吹き込み盤も製造するようになったが、複写盤も平行して販売していた。岡田は「大阪蓄の初期の1枚刷り目録を見ると、『吹込音譜』と称する自社吹き込み盤が120数種なのに対し、『普通音譜』と名付けられた『複写盤』が400種以上もある」（岡田1991.8）と述べている。つまり、設立初期には自社吹き込み盤と複写盤の割合が3対10であり、自社吹き込み盤の3倍以上の複写盤を製造していた。「ナショナル・レコードの品質は大変よく、大正初期のレコードの中ではAクラス。盤質が良いのでスクラッチも少なく、再生音は明瞭」（岡田1991.8）であったという。SPレコードを専門的に研究する岡田のこの見解は、大阪蓄音器の製造技術が高かったことを示している。さらに、さすが「関西の複写盤製造の大手」と称されるだけあり、「ナショナル複写盤の方も念入りに作られていて、他社の複写盤のように粗悪ではない。オリジナルよりも『音がよい』のではないかと思われるほど見事なできばえのものもある」（岡田1991.8）と評している。大阪蓄音器は複写盤製造の技術向上と相俟って、自社吹き込み盤の製造販売へと乗り出したといえる。

レコード1枚の価格は、自社吹き込み盤が1円30銭、複写盤が1円であった。自社吹き込み盤については（岡田1991.8）（山口1936:183）（倉田1992:82）にも、同様に1枚1円30銭との記述がみられる。

2.3 レコード曲種 —歌舞伎と宝塚少女歌劇—

次に、大阪蓄音器が発売した曲種を整理する。表1⁹⁾は『SPレコード60,000曲総目録』などの記録をもとに、作成したものである。

表1の曲種を音楽ジャンル別に分類すると、講談、義太夫、浄瑠璃、書生節、端唄、小唄、清元、唱歌、ピアノ曲、宝塚少女歌劇などが挙げられる。表1以外に、他の文献で確認できたジャンルとして、歌舞伎、都山流尺八、筑前琵琶、薩摩琵琶、謡曲、新内、浪花節、万歳、源氏節、落語、琉球音楽がある（山口1936:183）（岡田1991.8）。日本の伝統芸能や語りもの、歌いもの、大衆芸能から西洋の芸術音楽まで、幅広いジャンルを網羅している。

山口は「白熊ナショナルレコードが関西市場に、そ

の存在理由を鮮明にした素因は、今は故人の中村雁治郎と初期の宝塚少女歌劇との録音にあった」（山口1936:183）と強調している。歌舞伎の中村雁治郎は『仮名手本忠臣蔵 7段目一力茶屋の場』『忠臣蔵 6段目引窓』『紙治』などを録音し、そのレコードは大変評判となったと称されている。

また、特筆すべきは、初めて宝塚少女歌劇の録音を実施したのが大阪蓄音器であったことである。演目（曲目）としては、『カフェーの女』『欧州戦争』『桜大名』『中将姫』『下界』『ベニスの夕』『桃色鸚鵡』『夜の巻』などが記されている（山口1936:183）。表1にも、宝塚少女歌劇の録音として、A407『下界（上）』A408『下界（下）』が確認できる。これらのレコーディングには、宝塚第1期生の雲井浪子、高峰妙子、篠原浅茅などが参加している。

作家の正岡容は宝塚少女歌劇のレコードについて、次のように述べている。「宝塚少女歌劇の事は…中略…大阪蓄音機会社の『レコード』（ダイタクと呼んだ）で知っていて、『桃色鸚鵡』や『やつしつし』の入っているレコードにみんな白熊印のレッテルが貼ってあったこと。その後その白熊レコードの運命は（1番最初に宝塚の歌劇を吹き込んだレコードなのに）そもいかに？」¹⁰⁾。正岡が危惧していた大阪蓄音器の活動は、1912年設立からわずか6年余りで、オリエンツ・レコードに併合吸収された。しかし、大阪蓄音器の原盤のほとんどは引き継がれ、オリエンツの各レーベルで再発売されている。

2.4 大阪蓄音器のレーベル

レーベルは大きく5つの種類に分けることができる。しかし、レーベルには自社吹き込み盤も複写盤も同じく白熊の絵が印刷されているため、両盤を見分けるのは大変難しい。岡田によると、「簡単な見分け方は、『地球の上の白熊』は大阪蓄音器自社吹き込み盤』『氷山の上の白熊』は複写盤」（例外もあり）」（岡田1991.8）が基本であるという。しかし、実際に現存しているレコードとレ

ーベルを照合すると、例外が多くあるため、岡田の見解はあくまでも参考に留めたい。また、「レコード番号で見分けるならば、自社吹き込み盤は頭にAが付いているのに対し、複写盤はAがついていないか、レコード番号そのものが付いていない」（岡田1991.8）。表1には「地球の上の白熊」レーベルを「白熊地球儀」と原本表記のまま載せている。確かに、A128などレコード番号の最初にA、あるいは特Aが付されている盤は「白熊地球儀」である場合が多い。しかし、A446『八木節音頭』A447『八木節音頭』に関しては、「ニッポノホンの複写盤」と記載されており、必ずしも頭文字Aのみで盤の種類を判断できるとはいえない。

自社吹き込み盤のレーベルの種類の中で、岡田が〔タイプI-a〕としたレーベルは薄緑色の地球儀の上に白熊が乗っている図である。多色刷りでレーベルの周囲は金色。文字の色は、上のNATIONAL RECORDと登録商標が青色で他は黒色である（岡田1991.8）。例として、写真1 A455『浄瑠璃 お俊傳兵衛(下)』¹¹⁾を掲載する。このレーベルが、ナショナル・レコードの代表的な自社吹き込み盤である。

複写盤のレーベルは数多くあるが、ここでは表1に掲載した429『梅の春（三）』のレーベルを参照されたい。次々ページの写真2 429『梅の春（三）』¹²⁾は氷山の上に白熊が乗っている図である。レーベルの周囲は金色。文字の色は、上のNATIONAL RECORDと登録商標が金色で他の英字は白抜き文字である。

琉球音楽レコードに関して、岡田は「私はまだ見たことがないが、ナショナル・レコードには琉球譜が20枚あり、民謡資料として貴重。琉球譜は、レコード番号の最初にアルファベットの『O』が付く」と述べている。現時点において、筆者もレコードの現物を確認できていない。だが、『琉球新報』や普久原朝喜による富原盛勇の歌に関する証言などを総合的に鑑みると、大阪蓄音器における沖縄音楽レコードは製造、販売されていたといえる。

表1 大阪蓄音器株式会社・主な曲目リスト

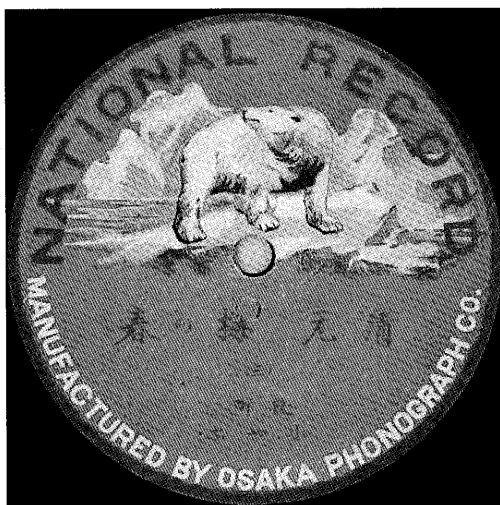
レコード 番号	曲名	歌唱・演奏・演者	伴奏	レーベル種類
197	汽車	納所文子		
197	村祭り	納所文子		
198	雁	納所文子		
198	冬の夜	納所文子		
305	笠の段	梅若萬三郎		
306	山姥	梅若六郎		
429	清元 梅の春(三)	葎町 小やな		複写盤
430	清元 梅の春(四)	葎町 小やな		複写盤
493	八百屋お七	豊年齋梅坊主		
610	追分節	竹養法界連中庄司		
611	松前節	庄司法界連中		
1016	義太夫 壺坂寺 切(上)	大阪竹本大隅太夫・豊沢団平・豊澤仙之助		
1017	義太夫 壺坂寺 切(下)	大阪竹本大隅太夫・豊沢団平・豊澤仙之助		
1022	寺子屋(1)	竹本南部太夫	(絃)豊沢猿糸	
1023	寺子屋(2)	竹本南部太夫	(絃)豊沢猿糸	
1044	太功記十段目	井上里貴司	豊沢新左エ門	
1045	太功記(夕顔棚)	井上里貴司		
1056	浄瑠璃 恋娘昔八丈(鈴ヶ森)(一)	竹本綴太夫	竹沢団六	
1057	浄瑠璃 恋娘昔八丈(鈴ヶ森)(二)	竹本綴太夫	竹沢団八	
1074	浄瑠璃 三十三間堂	豊竹呂昇		
1100	朝顔宿屋(上)	豊竹呂昇	豊竹呂昇	
1101	朝顔宿屋(下)	豊竹呂昇	豊竹呂昇	
1108	明鳥(上)	豊竹呂昇	豊竹呂昇	
1109	明鳥(下)	豊竹呂昇	豊竹呂昇	
1160	白骨御文章	真宗僧侶		
1172	御所桜(1)	竹本源太夫	野沢勝市	
1173	御所桜(2)	竹本源太夫	野沢勝市	
1229	声色	豆六/すみ/床菊		
1229	山寺の和尚	豆六/すみ/床菊		
1240	書生節 嗟高千穂	神長瞭月		
1241	書生節 書いてる節	神長瞭月		
5095	道は六百八十里	納所文子		
5095	軍艦行進	納所文子		
A128	端唄・小唄 海晏寺	久の家登美子		白熊地球儀
A137	端唄・小唄 博多節	久の家登美子		
A192	御大礼奉祝唱歌	大塚種子		白熊地球儀
A193	君が代	大塚種子		白熊地球儀
A291	講談 故小松宮殿下御美徳(1)	桂家残月		白熊地球儀
A292	講談 故小松宮殿下御美徳(2)	桂家残月		白熊地球儀
A407	下界(上)	宝塚少女歌劇団		自社吹込み盤
A408	下界(下)	宝塚少女歌劇団		自社吹込み盤
A425	梅川忠兵衛(上)	豊竹仙龍	竹本小住	
A426	梅川忠兵衛(下)	豊竹仙龍	竹本小住	
A445	桃太郎	豊年齋梅坊主		
A446	八木節音頭 継子三次(一)	上州 掘込源太	はやし連中	ニッポノホンの複写盤
A447	八木節音頭 継子三次(二)	上州 掘込源太	はやし連中	ニッポノホンの複写盤
A455	浄瑠璃 お俊傳兵衛(下)	豊竹仙龍	竹本小住	白熊地球儀
A461	金色夜叉(1)	成美団松浪義雄/和歌浦糸子		白熊地球儀
A461	金色夜叉(2)	成美団松浪義雄/和歌浦糸子		白熊地球儀

A472	ピアノ Hungarian Rhapsody(Par.I)	Prof Paul. Scholz	作曲:Liszt,Franz	白熊地球儀
A472	ピアノ Hungarian Rhapsody(Par.II)	Prof Paul. Scholz	作曲:Liszt,Franz	白熊地球儀
特A264	可笑節	神長瞭月		白熊地球儀
特A265	アイドントノー	神長瞭月/久の家登美子		
特A365	講談 閑院宮妃殿下御仁慈(上)	桂家残月		白熊地球儀
特A366	講談 閑院宮妃殿下御仁慈(下)	桂家残月		白熊地球儀
無番号	道は六百八十里	納所文子		
無番号	軍艦行進	納所文子		
無番号	戦友	納所文子		
無番号	浄瑠璃	豊竹呂昇		複写盤

写真1 A455『浄瑠璃 お俊傳兵衛(下)』



写真2 429『梅の春(三)』



2.5 大阪蓄音器の新聞広告

大阪蓄音器は本社がある大阪の地方紙『大阪毎日新聞』に、自社吹込み盤を制作し始めた時期から広告を掲載していた。例として、1915(大正4)年7月11日付の広告、図1を参照されたい。見出しには「大声蓄

音器大景品附大割引責任販売」と銘打ち、売り込む蓄音器の写真を前面に出した広告である。さらに、価格8円50銭の蓄音器を注文した人には、景品としてレコードを進呈する“特典付き蓄音器販売”を実践していた。レコードのリストをみると、ニッポノホンから浪花節の吉田奈良丸、京山小円、ライロホンから桃中雲右衛門などの演目が並び、他社の複写盤を特典としていたことは明らかである。そして、「大阪『市内に限り』電話にて御報次第持参す」とあり、電話で注文を受け付け次第、自宅まで商品を届けるというサービス精神は徹底している。

表2「大阪蓄音器株式会社の活動年表」は『大阪毎日新聞』や『琉球新報』の広告記事を時系列化し、作成したものである。「大声蓄音器大景品附大割引責任販売」の広告は1915(大正4)年6月から10月の期間、毎月2回掲載している。景品レコードの演目は若干異なるものの、ほぼ同内容とみていいだろう。その後、同年11月から1916(大正5)年1月まで、広告掲載は見当たらない。新たに広告が打ち出されるのは、1916(大正5)年2月から1917(大正6)年2月まで合計11回の掲載であった。掲載頻度を1915年と比較すると、約半分に減少している。

その後、大阪蓄音器は東洋蓄音器に併合され、原盤のほぼ全てを移籍したため、大阪蓄音器単独の広告は見られなくなる。1917(大正6)年1月8日、4月2日、5月5日の3回のみ、大阪蓄音器の代理店として、酒井公声堂の広告が掲載されている。

表2の右列には、沖縄音楽レコード制作に関する沖縄側の動向をまとめている。琉球音楽奨励会主催によるレコーディングは、大阪蓄音器が自社吹込み盤を手掛け始めた3ヶ月目に実施されている。9月にはレコード受取りのため森楽器店主が大阪まで出向き、10月にはレコードが沖縄に到着し、首里の音楽会で鑑賞され、聴衆が大いに興味を抱いたことが読み取れる。11月に入ると、沖縄音楽レコードの複写盤が他の店で販売されている事実が問題視され、結局、森楽器店が複

写盤を買い取り、それらを自ら販売するという広告が打ち出される。

このように、沖縄音楽のレコード制作は大阪蓄音器が新たな事業に力を注ぎ、盛んに宣伝広告を打ち出している時期に実現していた。さらに、東京に出張所を設置するなど、販路を拡大し始めていた大阪蓄音器の積極的な営業活動とも連動している。なお、1926（大正15）年1月22日『琉球新報』に掲載された森楽器店の広告「琉球レコード目録」には、大阪蓄音器による沖縄音楽レコードほぼ全ての曲目が一覧できる。これは、沖縄音楽の初録音から12年後の1926年においても、森楽器店で大阪蓄音器のレコードが販売されていたことを示している。

図1 大阪蓄音器の広告『大阪毎日新聞』
1915（大正4）年7月11日

大響蓄音器大景品附大割引責任販賣

本機は機蓋の直徑一尺五分高さ五寸五分喇叭口徑一尺四寸の七枚銅ニッケル構造音シグ式原形機にて音律正確發聲響る人なり今回五百番限注文者へ左記大景品進呈す望の方ハ「ハガキ」にて申込次第荷爲替附にて送る一市内に限り電話にて御報次第持参す不向の節は無引他品交換又は返金す



家庭の樂

●音譜等品三百回使用保附き兩面六拾五錢定價表は郵券貳張を要す
●近頃玩具的の蓄音器を誇大に廣告し注文者へ迷惑を與ふる不徳商店あり

大阪市東區上本町五丁目停留所南人
電話南一二三八極替大阪二五〇八二

發賣元 **大阪蓄音器商會**

壹臺 金八圓五拾錢
(運賃及荷造箱代電價)

景品(練聲音譜即ち「レコード」壹等品選花
山門五郎正宗孝子傳 京山小園の別荘 櫻右
中川伊勢吉の編隨院長兵衛 津嶋春子大夫
の三勝酒風 呂舟の先代萩 大阪南地政廳の
博多節(カチエーシヤ)陸海軍軍樂隊 筑前
至響常陸丸以上拾種替針貳百本進呈す

3 なぜ〈大阪蓄音器〉だったのか

前項までの考察により、大阪蓄音器が制作した沖縄音楽レコードの実態が少しずつ明らかになってきた。だが、ここで大きな疑問が残る。琉球音楽奨励会は、なぜ沖縄音楽のレコード制作を大阪蓄音器に依頼したのだろうか。というのも、大正4年当時、日本の各都市には外資系レコード会社を初め、国産の蓄音器商會やレーベルが少なからず存在していたからである。その中で、琉球音楽奨励会の要請に応え、なぜ大阪蓄音器が日本の辺境である沖縄まで来訪し、レコーディングを試みたのか。これらの理由について、以下の2点が考えられる。

3.1 日本本土～沖縄間を航海した大阪商船

大阪商船は明治・大正・昭和（戦前）を通じ、日本本土～沖縄間の航路に独占的地位を保持していた。ここでは、大阪商船による貨客船の就航頻度を振り返る。1885（明治18）年には大阪～沖縄航路が開設され、汽船1隻で毎月1回航海していた。1897（明治30）年、沖縄經過台湾線開始のため一旦休止したが、1909（明治31）年大阪～沖縄航路を再開し、毎月4便発航していた。1910（明治43）年には鹿児島郵船の協定船・沖縄丸を含む5隻により、毎月10便にまで増加している。しかし、1916（大正5）年になると毎月8便に減じ、1917（大正6）年11月には那覇丸、宮古丸、温州丸の3隻で毎月6便航海するにとどまった（大阪商船1934:151-153）。

大阪商船の就航頻度をみると、大阪蓄音器が沖縄音楽レコードを制作した大正4年当は毎月10便航海しており、明治～大正期において最も就航頻度が多い時期にあたる。他の商船会社との競争や運賃の値上げ、配船などにおいて問題はあったものの、大阪～沖縄航路の需要は高く、人や物資の運搬に欠かせない交通手段だったことが確認できる。

森楽器店がレコードや楽器、楽譜などの商品を、どこの地域から卸していたかは不明である。だが、沖縄県外からの商品に関しては、大阪～沖縄航路を通じて仕入れていたことが推察される。よって、森楽器店内の琉球音楽奨励会が主催をした沖縄音楽レコードも、大阪商船が所有する貨客船で大阪から沖縄へ届けられた。事実、1.3の(1)で示したように、森楽器店主は製品化されたレコードを受取るために、大阪に出向いている。レコードの仕入れ・販売には、大阪～沖縄間の航路が必要不可欠だったことを表している。

表2 大阪蓄音器株式会社の活動年表

西暦(元号)	大阪蓄音器株式会社の活動	沖繩音楽の録音・レコード到着・販売
1912(大正元)	10月1日 櫻尾長右衛門が大阪市南区長堀橋筋2丁目に大阪蓄音器株式会社を設立	
1912(大正元)	初めは複写盤を製造 製品はナショナルレコード 商標は白熊印	
1915(大正4)	3月1日 大阪市南区塩町2丁目8番地へ移転	
1915(大正4)	6月から自社録音盤(1円30銭)を制作、白熊印ナショナルレコードの名で販売(複写盤(1円)も継続)	
1915(大正4)	6月1日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	
1915(大正4)	6月15日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	
1915(大正4)	7月1日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	
1915(大正4)	7月15日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	
1915(大正4)	8月1日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	
1915(大正4)	8月13日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	8月28日-31日 那覇市奥武山公園内・城間氏別荘で琉球音楽奨励会主催のレコード録音を実施
1915(大正4)	9月1日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	9月 森楽器店主がレコード受取りのため大阪へ出向く
1915(大正4)	9月15日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	
1915(大正4)	10月1日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	10月 琉球音楽レコードを那覇丸に積み大阪から発送
1915(大正4)	10月15日 『大阪毎日新聞』 広告「御大典記念景品附大蓄音器大割引責任販売」 東区上本町5丁目	10月14日 『琉球新報』 記事「本県の音曲が蓄音機のレコードに入りたるは之を以て嚆矢とす」
1915(大正4)		10月18-19日 日 基督教主催による音楽会開催
1915(大正4)		10月20日 琉球音楽レコード沖繩丸にて沖繩へ到着。森楽器店に届く
1915(大正4)		10月23日 『琉球新報』 大広告「本県家庭の大福音／琉球歌と蓄音器」
1915(大正4)		10月23-24日 日 基督教主催の音楽会／琉球古典音楽大家の演奏と琉球古典音楽レコードとの対照試験
1915(大正4)		11月 琉球音楽レコードの複写盤を75銭で売れる店あり、森楽器店ではその複写盤を取寄せ45銭で販売
1915(大正4)		11月24日 『琉球新報』 広告「大蓄音器と琉球音譜大割引」 複写・現価75銭 特価45銭 現吹込:1円50銭 特価1円
1916(大正5)	東京市神田区鍛冶町8番地(今川橋大通)に出張所を設置	
1916(大正5)	2月11日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	
1916(大正5)	3月10日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	
1916(大正5)	4月19日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	
1916(大正5)	6月4日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	
1916(大正5)	6月15日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	
1916(大正5)	7月8日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	
1916(大正5)	8月8日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	
1916(大正5)	8月21日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	
1916(大正5)	9月14日 『大阪毎日新聞』 広告「大蓄音器大景品附大割引責任販売」 大阪市東区上本町5丁目	
1917(大正6)	12月15日 『大阪毎日新聞』 広告「保険附大蓄音器大景品附大割引責任販売」 東区上本町5丁目	
1917(大正6)	1月 東洋蓄音器(オリエントレコード)に併合され、原盤のほとんどを移籍	
1917(大正6)	1月8日 『大阪毎日新聞』 酒井公声堂の広告「偽物アリ白熊印ニ御注意/肉声原盤白熊印特製両面」	
1917(大正6)	2月15日 『大阪毎日新聞』 広告「保険附大蓄音器大景品附大割引責任販売」 東区上本町5丁目	
1917(大正6)	2月15日 大阪市北区東野田町7丁目10番地へ移転	
1917(大正6)	4月2日 『大阪毎日新聞』 大阪蓄音器代理店・酒井公声堂 広告「御待兼の至嫁少女歌劇団吹込新音譜」	4月16日 『琉球新報』 急告「第2回吹込琉球新音譜着荷」但し専売特許盤 森楽器店(日本蓄音器商會特約店)
1920(大正9)	5月5日 『大阪毎日新聞』 代理店・酒井公声堂 広告「5月売出新音譜 肉声原盤ニッポノホン赤熊印」	4月28日 第2回音譜は第1回音譜より音声が良好 《観アノマナー節》は買手多く売り切りの姿なり
1921(大正10)	7月1日 清算を結了。自社録音盤(1円30銭・約120数種) 複写盤(1円・400種以上)	
1926(大正16)	この頃まで白熊印のレコードが市場に出回る	1月22日 『琉球新報』 広告「琉球レコード目録」 森楽器店(内外蓄音器一式/琉球レコード製造元)

3.2 自社吹込み盤を製造する大阪のレコード会社

明治～大正時代にかけて、日本全国でレコード会社の設立が相次いでいた。1907（明治40）年に日米蓄音機製造株式会社が設立し、後に当社を発展解消した日本蓄音機商会在1910（明治43）年に設立される。日本蓄音機商會は、ニッポノホンという商標で知られるレーベルである。1913（大正2）年には東京・日本橋に設立された富士山印の東京蓄音器が、主に浪花節や義太夫などのレコードを制作した。さらに、1919（大正8）年には東京でヒコーキ印の帝国蓄音器商會が設立される。一方、京都では1912（大正元）年に東洋蓄音器株式会社が設立されたものの、1917（大正6）年には東洋蓄音器合資会社に買収されてしまう。東洋の株式会社は自社吹込みの新譜を発売したのに対し、東洋の合資会社は複写盤の製造に重きを置いていた。結局は、合資会社が株式会社の本盤を引継ぎ、再発売することになる。そして、東洋蓄音器とほぼ同時代に活動していたのが大阪蓄音器であった。

3.1で述べたように、沖縄と日本本土の交通網は大正4年当時、大阪～沖縄間の貨客船にほぼ限定されていた。もちろん、大阪から東日本の都市を結ぶ船舶は航海しており、大阪や神戸から乗り継いで、東京へ行くことは可能であった。しかし、輸送にかかる日数や費用を考えると、大阪からの直行便で沖縄へ運び入れた方が商業的には負担が少ない。東京には日本蓄音器商會や東京蓄音器が新譜を盛んに発売していたが、沖縄へ録音技師を派遣する費用や輸送の面を考慮すると、琉球音楽奨励会の負担が非常に大きい。東洋蓄音器は自社吹込み盤を製造していた会社だが、京都から大阪港までSPレコードを安全に運搬する交通手段が必要であった。SPレコードは後のEPやLPレコードとは異なり、少しの振動にも敏感に反応し、非常に割れやすい性質のものである。陸路でSPレコードを運ぶ安全性を重視すると、京都の会社を選ぶことは考えにくい。

したがって、大阪港に近い大阪市内に設立された会社であり、自社吹込み盤を制作し始めたばかりの大阪蓄音器が、琉球音楽奨励会にとって最も適当であったと考えられる。

4 まとめ

これまでの考察によって、以下の4点が結論として述べられる。

第1に、1915（大正4）年に大阪蓄音器によって録音・制作・販売された沖縄音楽のレコードは、近代沖縄の歴史上、最も早い記録である。この記録以降、

1926（大正15）年にニッソーレコード、1927（昭和2）年に丸福レコード、1934（昭和9）年に日本コロムビアが沖縄音楽のレコードを制作している。しかし、これらのレコードはいずれも大阪・兵庫あるいは東京のスタジオで録音されたものであり、沖縄での現地録音は行われていない。

第2に、1915（大正4）年は「レコード」という新しい録音メディアを沖縄へ導入する気運が高まっていた時期であった。その要因の1つ目として、沖縄へ録音技師を派遣する費用からレコード制作・販売の資金を確保するため、琉球音楽奨励会という組織を立ち上げていた。2つ目として、レコードが沖縄へ到着する期日に合わせて、沖縄音楽の生演奏とレコードの聴き比べをする音楽会が開催されていたことが挙げられる。

第3に、録音された曲目の大部分が琉球王府時代から継承された琉球古典音楽であり、系譜としても縁のある人物たちが演奏していた。例えば、野村流の我謝秀益、小橋川朝英、城間恒有、伊差川世瑞、安元詠礪は、琉球王府時代の末期、琉球古典音楽が最も栄えた時期に活躍した野村安趙の高弟・桑江良真の弟子である。つまり、彼ら5名は野村の孫弟子にあたり、桑江を通して、琉球王府時代の気風や古典音楽の価値を受け継いでいる。また、安富祖流の金武良仁は、琉球王府最後の尚泰王を三線と歌で慰めたとされる人物である。安富祖流は「安室朝持によって演奏法の大系化がなされ、金武良仁によって完成された」¹³⁾といい、金武もまた琉球王府時代の音楽文化を継承した1人である。レコードが制作された1915年は、琉球王府が滅亡し、沖縄県が設置された1879年からわずか36年しか経っていない。したがって、初めて録音する曲目として、琉球王府時代の流れを組む琉球古典音楽のレパートリーを重視したことは当然の結果だったといえる。

第4として、大阪蓄音器制作のレコードが、後に丸福レコードを設立する普久原朝喜に影響を与えていた。普久原は「私が沖縄民謡のレコードを作ろうと思いついたのは、今から50年ほど前の大正7、8年頃であった。当時、沖縄民謡の先輩格にあった富原盛勇さんのレコードの『宮古根』と『山原手間当』を聞いて、非常な感激を覚えた」（普久原1969:269）と語っている。そして、その後「レコード制作の夢を抱き、技術を学ぶために、大阪へ渡った」（普久原1969:269）のである。沖縄におけるレコード聴取の体験が、沖縄音楽初の専門レーベル・丸福レコードの設立につながったことを示す、普久原の貴重な証言だといえる。

付記

本論を脱稿した後、以下のCDが発売されることを知った。大阪蓄音器が制作したSPレコードの復刻盤だと推測されるが、詳細については今後調査を進めたい。

CD『〈名盤復刻〉富原盛勇のナークニー』（キャンパス、BYC-8、2011年1月20日）

註

- 1) 1998「池宮城喜輝」『芸能人物事典』人外アソシエーツ、p.36
- 2) 1983「池宮城喜輝」『沖縄大百科』上巻、沖縄タイムス社、p.156
- 3) 1998「金武良仁」『芸能人物事典』人外アソシエーツ、p.208
- 4) 1983「古堅盛保」『沖縄大百科』下巻、沖縄タイムス社、p.396
- 5) 1983「桑江良真」『沖縄大百科』上巻、沖縄タイムス社、p.1003
- 6) 前掲1)
- 7) 大城學、1996『沖縄新民謡の系譜』ひるぎ社、pp.38-41
- 8) 1961年6月28日「師と弟子(35) 琉球民謡／譜久原朝喜／手製の三味でけいこ 私の恩師はレコードですよ。」『沖縄タイムス』夕刊、p.2
- 9) 表1は以下の資料をもとに作成した。2003『SPレコード60,000曲総目録』昭和館監修、アテネ書房。2006『日本伝統音楽資料集成 6 日本伝統音楽に関する歴史的音源の発掘と資料化』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター。大阪芸術大学博物館・平成19年度冬季所蔵品展「日本の蓄音機とレコード」視聴用レコードリスト。
大阪蓄音器
<http://zarigani.web.infoseek.co.jp/spp/spp9.htm>
- 10) 正岡容、1924年12月「宝塚人情噺」『歌劇』57号、阪急コミュニケーションズ、p.59。復刻版は、宝塚少女歌劇団編、1997『歌劇』雄松堂出版。
- 11) 大阪蓄音器
<http://zarigani.web.infoseek.co.jp/spp/spp9.htm>
の管理人から許諾を得て写真を掲載した。
- 12) 写真2は、大阪芸術大学博物館から提供いただいた。
- 13) 1983「安富祖流」『沖縄大百科』上巻、沖縄タイムス社、p.72

参考文献

- 大阪商船、1934『大阪商船株式会社五十年史』
- 岡田則夫、1991年6月「第9回 続・蒐集奇談」『レコード・コレクターズ』
- 岡田則夫、1991年8月「第11回 続・蒐集奇談」『レコード・コレクターズ』
- 岡田則夫、1993年7月「第32回 続・蒐集奇談」『レコード・コレクターズ』
- 倉田嘉弘、1992『日本レコード文化史』東京書籍
- 鈴木啓三、1980「大阪のレコード企業」『大阪春秋』8巻3号、pp.128-130
- 高橋美樹、2007「沖縄音楽レコード制作における〈媒介者〉としての普久原朝喜 —1920-40年代・丸福レコードの実践を中心に—」『ポピュラー音楽研究』第10号、日本ポピュラー音楽学会、pp.58-79
- 高橋美樹、2010『沖縄ポピュラー音楽史』ひつじ書房
- 高橋美樹、2010「近代沖縄における録音メディアの導入 —ニッソーレコード制作の八重山民謡SP盤を対象として—」『沖縄県立芸術大学附属研究所紀要 沖縄芸術の科学』第22号、pp.91-122
- 高橋美樹、2011（近刊）「沖縄音楽レコードにみる〈媒介者〉の研究 —1930年代・日本コロムビア制作のSP盤を対象に—」細川周平編『うたの地脈 —民謡の通文化的研究（仮）』ミネルヴァ書房
- 普久原朝喜、1969「創立当時のマルフレコード」高江洲義寛編『沖縄音楽総目録X 録音目録』沖縄タイムス社、pp.269-271
- 森垣二郎、1960『レコードと五十年』河出書房新社
- 山口亀之助、1936『レコード文化発達史 第壹巻 明治大正時代初篇』丸善

参考URL

- 戦前宝塚SPレコードレーベル集
<http://yamaton.hp.infoseek.co.jp/dukare-berul.html>